

歴史は語る

2013年6月1日発行 第7号 編集責任者 青田 勇

特集「初期の総会議長」

三浦冢先生のこと

総会議長 1930年～1941年

江藤直純



冢と書いて「いのこと」と読む。三浦冢は、ルーテル教会草創期に、一九歳で信仰を与えられキリスト者としての新しい生を享け、それから第二次世界大戦下を含む困難も多かった六十年余、ルーテル教会の牧師、指導者、神学教師、教育者としての生涯を送った。ルーテル教会の歴史は三浦を抜きには語れない。

一八八六(明治一九)年九月七日、三浦は久留米に生まれる。ちなみに、三浦 坪池、片岡(江藤)は久留米・有馬藩の上士の家柄だった。そのことと入信の関係は定かではない。学校を修えたあと鐘ヶ淵紡績に入社、しかしウラジオストツクで勤務中凍傷に罹り片足を切断する。帰国療養中に求道、伝道を始めて間もない久留米教会において宣教師 J・M・T・ウィンテルから洗礼を受けた。一九〇五(明治三八)年六月一日、ペンテコステの日だった。やがて共に献身することになる松本学明らと久留米教会の創建時代の中心となる。

路帖神学校ができたのは一九〇九年九月だが、翌年四月、同じ久留米出身の亀山萬里とともに正規の予科生として入学。詰襟姿の仲間たちと交じって端正な和服姿で集合写真に収まっている。一九一五(大正四)年、最初の全課程

を正規に修了したクラスの一人として九州学院神学部を卒業する。任地は下関、開拓伝道である。主日礼拝の他に、日曜学校を始め、火木は伝道説教会を開いたと記録されている。

一九二〇年、米国留学の途へ。ゲティスバーグ神学校とジョン・ホプキンス大学で学び、一九二三年帰国、総会では三浦を九州学院神学部の正教授(実践神学)に任じた。初のルーテル教会出身の日本人教師、言わば最初の生え抜きの神学教師である。その年は日本宣教三〇周年で活気に満ちていたが、七月に阿蘇で開かれた第三回夏期学校では「自然悪と神の愛」という講演をしている。その年九月に関東大地震が起こっている。三浦はどのような講演をしたのか興味深い。

一九二五(大正一四)年神学校は東京・鷺宮に移転、日本ルーテル神学専門学校となる。三浦は三代続いたアメリカ人宣教師の校長のあと、一九四一年に日本人初の神学校長に就任する。しかし、四三年には教団合同に基づく神学校合同のためルーテル神学校は、他教派の神学校と共に、日本東部神学校(翌四四年

には日本基督教神学専門学校)となり、三浦はその副校長兼教授となった。



ルーテル神学校から日本東部神学校に移ってからの第1回卒業生 木野学、中矢晋吾郎、藤田武春、福島宗二郎、後藤元治

上京以来の三浦の働きで特筆すべきことの一つは、一九三八(昭和一三)年にインド・マドラス(タンバラム)で開かれた第三回世界宣教会議に日本代表の一人として参加したことである。第一回エディンバラ大会には宣教師スタイワルトが参加。ルーテル教会のエキムメニカルな視野を広げる役割をしただろう。神学校教授の三浦は一九二九年にルーテル教会総会副議長、翌三〇(昭和五)年から四一年まで総会議長を務めた。この時期とは、一九三一年に満州事変が勃発し、十五年戦争と重なる。

歴代総会議長・副議長・書記・会計 (1920年から1971年)

年	議長	副議長	書記	会計
1920(大9)	米村常吉	J. A. リン	本田傳喜	北古賀吉太郎
1921(大10)	瀧本幸吉郎	植賀虎之助	本田傳喜	北古賀吉太郎
1922(大11)	瀧本幸吉郎	米村常吉	本田傳喜	青山彦太郎
1923(大12)	瀧本幸吉郎	米村常吉	本田傳喜	青山彦太郎
1924(大13)	瀧本幸吉郎	米村常吉	本田傳喜	青山彦太郎
1925(大14)	瀧本幸吉郎	米村常吉	本田傳喜	青山彦太郎
1926(大15)	瀧本幸吉郎	米村常吉	稲富 肇	青山彦太郎
1927(昭2)	瀧本幸吉郎	米村常吉	稲富 肇	青山彦太郎
1928(昭3)	瀧本幸吉郎	米村常吉	稲富 肇	青山彦太郎
1929(昭4)	瀧本幸吉郎	三浦 彥	本田傳喜	青山彦太郎
1930(昭5)	三浦 彥	稲富 肇	平井 清	坪池 全
1931(昭6)	三浦 彥	C.W.ヘブナー	稲富 肇	J.A.リン
1932(昭7)	三浦 彥	C.W.ヘブナー	稲富 肇	J.A.リン
1933(昭8)	三浦 彥	C.W.ヘブナー	稲富 肇	J.A.リン
1934(昭9)	三浦 彥	C.k.リップナード	平井 清	S.O.トーラクソン
1935(昭10)	三浦 彥	L.S.G.ミラー	平井 清	S.O.トーラクソン
1936(昭11)	三浦 彥	L.S.G.ミラー	平井 清	S.O.トーラクソン
1937(昭12)	三浦 彥	L.S.G.ミラー	平井 清	S.O.トーラクソン
1938(昭13)	三浦 彥	L.S.G.ミラー	平井 清	J.M.T.ウインテル
1939(昭14)	三浦 彥	L.S.G.ミラー	平井 清	J.M.T.ウインテル
1940(昭15)	三浦 彥	L.S.G.ミラー	平井 清	J.M.T.ウインテル
1941(昭16)	三浦 彥	本田傳喜	岸 千年	藤崎吉蔵
1942(昭17)	日本基督教団と合同した期間			
1943(昭18)				
1944(昭19)				
1945(昭20)				
1946(昭21)	岸 千年	大内弘助	田坂惇巳	青山四郎
1947(昭22)	岸 千年	A.C.クヌーテン	田坂惇巳	青山四郎
1948(昭23)	平井 清	山内六郎	牧瀬雄吉	青山四郎
1949(昭24)	平井 清	山内六郎	牧瀬雄吉	青山四郎
1950(昭25)	平井 清	山内六郎	牧瀬雄吉	坪池 全
1951(昭26)	平井 清	山内六郎	牧瀬雄吉	坪池 全
1952(昭27)	牧瀬雄吉	山内六郎	坪池 誠	坪池 全
1953(昭28)	牧瀬雄吉	H. アルスドルフ	坪池 誠	藤崎吉蔵
1954(昭29)	牧瀬雄吉	H. アルスドルフ	坪池 誠	藤崎吉蔵
1955(昭30)	牧瀬雄吉	山内六郎	坪池 誠	柏木信隆
1956(昭31)	岸 千年	三浦 彥	間垣洋助	井上三郎
1957(昭32)	岸 千年	山内六郎	間垣洋助	井上三郎
1958(昭33)	山内六郎	本田伝喜	益田啓作	井上三郎
1959(昭34)	山内六郎	本田伝喜	益田啓作	井上三郎
1960(昭35)	岸 千年	山内六郎	間垣洋助	井上三郎
1961(昭36)	岸 千年	山内六郎	間垣洋助	井上三郎
1962(昭37)	岸 千年	山内六郎	石居正己	井上三郎
1963(昭38)	岸 千年	河島亀三郎	牛丸省吾郎	井上三郎
1964(昭39)	岸 千年	河島亀三郎	牛丸省吾郎	浜田光行
1965(昭40)	岸 千年	河島亀三郎	牛丸省吾郎	丸山正昭
1966(昭41)	岸 千年	河島亀三郎	牛丸省吾郎	丸山正昭
1967(昭42)	岸 千年	河島亀三郎	牛丸省吾郎	丸山正昭
1968(昭43)	内海季秋	田坂惇巳	宝珠山幸郎	浜田光行
1969(昭44)	内海季秋	田坂惇巳	宝珠山幸郎	浜田光行
1970(昭45)	内海季秋	宝珠山幸郎	中島 誠	浜田光行
1971(昭46)	内海季秋	宝珠山幸郎	中島 誠	浜田光行
1972(昭47)	宝珠山幸郎	中島 誠	前田貞一	山田 操
1973(昭48)	宝珠山幸郎	中島 誠	前田貞一	山田 操
1974(昭49)	宝珠山幸郎	中島 誠	前田貞一	山田 操
1975(昭50)	宝珠山幸郎	中島 誠	前田貞一	山田 操

1920年の第1回総会で年会議長として米村常吉が選出された。ただし、この総会は宣教師会と年会の連合教職会議である。この「二院制」の制度が廃止され、内外人の区別なく一つの総会の下に再統合されるのは、1928年の第9回総会においてである。
 1963年は、旧日本福音ルーテル教会と東海福音ルーテルの合同総会となり、「運営委員会」が設置され、そのメンバーが合同教会の教会行政を担当した。#1972年以降は、憲法規則改正により、議長の指名により選出され書記は、事務局長を兼務することとなった。

戦争体制の強化の流れの中で、一九三九年には宗教団体が成立し、キリスト教界も日本基督教団への統合を強いられてきた。教会合同委員会へのルーテルからの委員二名の一人は三浦であった。彼は教会の合同には信条の一致が必須であることを強固に主張して交渉にあたったが、それも叶わず、また部制を敷いてそれぞれの教派的伝統・歴史的特質を守ろうとしたが、それまた、合同実現後まもなく部制解消の憂き目にあつた。三浦

は信条を守る戦いに全力を尽くしたが、悪魔的支配には抗しきれなかった。教会と国家の関係という宿題は残っている。
 戦後、いち早く「ルーテル会」が組織され、一九四七年に教団離脱、日本福音ルーテル教会再建、五〇年ルーテル神学校再開と動いていくが、一九四六年には熊本九州女学院の再建のため、三浦が院長となり、再来日して創立者エカードは名誉院長として協力した。六二年に辞任するまでキリスト教に基づく女子

教育の発展に尽力した。
 その後、三浦は房総半島の端にある銚子教会の牧師として二年間奉仕し、一九六四年七月九日、召天。七八年の生涯を伝道者として締め括った。ルーテル教会の歴史の中でいくつもの「初」を経験し、教会のさまざまな分野で要職を務め、歴史を拓いてきた。

妻道子もまた一九四九年の戦後第一回婦人大会で婦人会連盟会長に選ばれるなど生涯にわたって家の良き伴侶だった。すでに召された長男義和とその長男謙もルーテルの牧師となり、教会の重要な任を担った。次男故哲夫、長女玲子(三沢)たちも信徒として忠実熱心に教会に尽くした。親の背中を見て育つたのだろう。筆者が子どもの頃に見ていた家の上品・温和な面影が懐かしい。



路帖神学校時代の教職員と学生 (明治四十四年撮影)
 (後列左より) 波邊謙、龜山萬里、村上二郎、川瀬徳太郎、松本學明、高橋信太郎、三浦家、今井良雄、本田傳喜(前列左より) 鷺山晴誠、遠山参良、奥太一郎、ブラウン、ウインテル、高橋長七郎、秋元茂雄

岸千年先生のこと

総会議長

1946年～1947年、1956年～1957年、
1960年～1967年

石田順朗(定年牧師)

恩師、岸千年牧師(一八九八～一九八九年)のことは、随分と書いてきた。英文の近刊『アジアのルーテル信徒たちの物語』(Lutheran University Press, 2012)の「日本」の章では「Mr. Lutheran」の異名で叙述した。今一度先生の遺著『み手にみちびかれて』(聖文舎、一九八八年)をひも解きながら…。

「故郷脱出」により、先生ほど、生まれ故郷を脱出し紆余曲折「神のふるさと」へ辿り着いた人物は他に少ないと思う。岐阜県関市に近い蜂屋村(現美濃加茂市)



一部)にあつた岸本家の次男に生まれ、家業の不運で岐阜、名古屋をへて東京は神田の中学に転学。程なく病をえて闘病生活四年後、築地の立教中学の四年編入。近くの浸礼教会に通い始め、一九一四年九月、受洗。はたまた一家の名古屋移転で名古屋学院の前身名古屋中学に転入、バプテスト教会へ通い続けたが、偶々牧師転任で集会中断の折、伝道を始めたルーテル派米人ホーン宣教師との出会いが「生涯の一大転機」となった。集会を手伝いつつ関西学院高等部英文科へ入学したが(一九一九年)、その

夏ホーン先生の支援で渡米留学する身となり、バージニア州、ローノーク大学を経てサウスカロライナ州のルーテル南神学校を卒業、ハートフォード神学校修士課程でルーター神学を一学期修めるや「ニューヨークから脱出」。欧州経由で帰国の途上、ドイツ・ライプツィヒ大学での夏期研修を終えた。

一九二七年秋帰国した先生に瀧本総会議長からの久留米教会赴任の通知。受按は一九二九年。三年に亘る牧会の後、家族と共に門司へ転任、三年後には神戸東教会へ転じて開拓伝道を行ない、一九三五年、義父米村牧師を継いで京都教会へ赴き十二年間の牧会に携わった。「京都は、一番苦勞した時代でもあつた」と記し、「わたしの力の限界にきたと思つたこともある」と弱気を覚えながらもパウロにならい「自分をばげましたこともたびたびあつた」。この間、堀川警察署留置場事件。一九四四年戦争末期の九月中は、特高に連行され「天皇とキリストとどちらが上か」と数週間に亘る執拗な尋問と苛酷な拷問を耐え抜いた挙句「十月の終わり頃簡易裁判にかけて、罰金百五十円を払って留置場から放免された」。「脱出」を繰り返してきた先生には「勝利者キリスト」と共なる「躍動」であつた。

基調にするスウェーデン・ルンド学派を紹介、その感化を日本のルーター神学思潮に及ぼし、長年のルーター研究を重ねた論文『ヘブル書講解におけるルーターの神学思想』で同志社大学より神学博士を授与されたのは六十二才の一九六一年のことだつた。

「神の家族へ」「若いとき心臓をいためて『あと二時間の命ですよ』と宣告された者が、いまだに生きつづけているということは『当時九十才』。世界に友をもつこともまた感謝すべきことである。片田舎の農家の子に生まれ、順当に事が運ばば、僧侶としての生涯をおくるはずであつたのに、」と回顧される。独善的教派主義に陥らず、日本福音ルーテル教会の再興を成し遂げるも、日本キリスト教協議会に深く関わり、聖書協会、エキュメニカル協会、基督教児童福祉会などの理事長を務め、さらに神学と精神医学の会や日本ワールド・ヴィジョンにも連なる活動を死の直前まで精力的に同時進行させた。アメリカ並びにフィンランドにある諸大学は名誉博士号を授与すること(計五つ)ミスター・ルーセランを国際的に称えた。

恩師平井清先生を偲んで

総会議長 1948年～1951年

杉山昭男（定年教師）

人の一生は人との出会いによって決まる。それは、自分の命を生み出した両親を始めとして、兄弟姉妹、友人、先生等様々の人間との出会いによって決定的な影響を受ける。

中でもその人の一生に、この人との出会いがなければ、現在の自分はないと考えられる重要な人との出会いがある。恩師平井清先生は、私にとってそのような先生の一入である。

私と平井清先生との出会い



は、当時先生が都南教会の牧師をしておられ、私は東大の学生で、戦後の混乱期、ノイローゼにかかって、フロイドのまな弟子であった古沢平作先生から精神分析を受け、やつと立ち直った頃のことである。キリスト教との初めての出会いは、私の近くにあったスエーデンの宣教師のピアソン夫妻の感化による所が大きい。当時たまたま散歩の方々都南教会の前を通った時、この平井清先生が庭仕事をして

おられた時に
出会ったこと
が、私にとつて
ルーテル教会
に通うように
なった最初の
動機となる。
平井先生は、
最初この馬の
骨かからない
ような私に、親

しく接して、次の日曜日の礼拝に誘われたのが、先生との出会いの初めだったように思う。それから先生の説教やその牧会者としての行き届いた温かい人柄によって、迷える私は、たちまち捕らえられ、先生のありとあらゆる集会に出席し、ご家族の一員の如く親しくもてなされたことを思い出す。こうした意味で、平井先生との出会いは、その牧会者としての人柄、迷える子羊を暖かく迎え入れる暖かさ、一面古武士のような厳格さと、家族を含めた牧会的配慮、そして何よりも先生の博学多識の人格に圧倒された点にある。

先生は当時のルーテル神学校校長の岸千年とも盟友であられ、当時の神学校の新約学の教授としても奉仕され、私が都南教会に関わって3年目頃NCCの総幹事として迎えられ、確か雪ヶ谷教会に転任されたのを思い出す。その後、田坂惇巳先生が都南教会を引き継がれ、私も田坂先生時代にルーテル神学校に入学するようになったが、平井先生の導きとその神学的、一般的な学識による感化が無ければ、現在の私は考えられない。ご家族は、ご長男が医者にな

られ、次男の栄牧師が後に献身されて、ルーテル神学校で私と同期となられたが、三女の父であられ、今は皆様夫々結婚されて家庭を持っておられる。平井清先生の夫人は牧師夫人として申し分ない方で、先生の牧会の背後にはこの暖かい牧師夫人としての行き届いた働きなしには考えられなかったのを思い出す。

ご長男もご次男の栄牧師も今

平井清の略歴

平井清は一八九六年十月四日、福岡県遠賀郡に生まれる。一九二一年四月一六日、博多教会で山内量平から洗礼を受ける。福岡修猷館中学を卒業後、一九一八年、九州学院神学部に入學する。一九二〇年四月六日から十三日、熊本で開催された第一回日本福音ルーテル教会総会で、「神学生で高等学校の卒業生にして性向学力優良なる者は米国神学校に送る」との案件が決議され、神学生の平井が特別に選ばれ、ノースカロライナ州レイノア大学に九州学院神学部卒業前に留學していった。その後、彼は一九二三年同校を卒業後、フィラデルフィアにあるマント・エアリー神学校に一九二六年卒業し、帰路ヨーロッパを回り、ドイツのライプツヒヒ大学で暫らく学んで、一九二七年に七ヶ年の研鑽を経て帰国し、久留米教会での総会で名古屋伝道の任を受け、名古屋千種教会の献堂に携わった。一九三一年七月、平井清は東京の目黒教会に転任し、一九四〇年十月からは神学校教授職も兼務した。戦後の、一九四八年の第一回総会にて総会議長に選出される。

はこの世を去られ、天国で憩うておられるのを思うと、83歳になつた私も先生をはじめご家族の方々との再会も間近になつたと思う昨今である。
さて、先生の引退後も度々先生のお宅にお伺いしてご指導を受けたが、ご葬儀には、人の一生の大きな影響とその感化に思いをはせながら、私もかくありたいと思つた次第である。

山内六郎先生と博多教会

総会議長 1958年～1959年

坂井信生(博多教会員)

山内六郎先生(以下敬称略)は、博多ルーテル教会第四、第六代牧師である。

山内は一九〇三(明治三六)年福岡県直方に生まれ、二二年直方教会で和佐恒也から洗礼を受けた。その後献身を決議し神学校に進み、二九年卒業と同時に博多教会に招聘された。三九年フィラデルフィア神学校留学のため辞任するまでの一〇年間、博多教会の充実と発展への



山内の貢献は顕著なものがある。山内は帰国後久留米教会に赴任するが、戦後の四九年再度博多教会に招かれた。

ともあれ、山内は第四代牧師として博多教会に着任した。山内が前任牧師と大きく異なるこのひとつは、初代山内量平、二代青山彦太郎とともに日本基督教会(長老派)、三代値賀虎之助がメソジスト教会と、他教派出身牧師であったのに対し、山内は生粋のルー

テル教会人牧師ということである。

今ひとつは、前記三牧師が五〇歳を過ぎての着任であり、当時としてはすでに老境に達し

た牧師であった。博多教会は今や宣教開始二十余年の青年教会に成長しており、新進気鋭の若き牧師山内の着任は、博多教会が名実ともに「ルーテル」教会として、大きく躍進していくにふさわしく最適であったと評価することができよう。

山内の博多教会在任期は、日本が第二次世界大戦へと突っ走るまさしくその前夜である。こうした困難な時流の只中にありつつも、山内は着任直後に教会の完全自給を達成している。また、青年会、婦人会につぐ第三の組織、「七灯会」なる名称の壮年会結成にも指導的役割を果たした。さらに、三一年箱崎での幼稚園創設を機に箱崎伝道を開始、今日の箱崎教会の基礎を築いたのも山内である。

山内が博多教会の牧会できとくに重視したのは、最近ではほとんど開かれていない夕礼拝である。「博多町人の救霊」をモットーとした当時の博多教会は、朝礼拝に出席困難な商店勤務の人々のため、夕礼拝に格別の配慮をしたからである。山内は六尺豊かな堂々たる体躯で博覧強記、深い学識に裏打ちされた音

吐朗々の名説教家であった。かれのみ言の説き明かしは博多教会での朝夕の礼拝はもろろんのこと、他教会での伝道説教などでも、聴く人の心に信仰の勧めと励ましを強くあたえたのである。

留学のために辞した山内のあと、坪池誠が戦中戦後の多難な時期に博多教会の牧会を担当したが、四九年神戸東教会に転ずることとなった。その後任として招聘されたのが山内で、第二次山内時代を迎えることとなる。この時期で特筆されるべきは、再度の教会自給達成である。戦時中の難局に際して自給継続が不可能となっていたが、戦後の教会再建にともない経済力も培われ、山内の指導のもと、五〇年に再度の自給を達成したのである。

山内は博多教会牧会の重責を果たしながらも、ルーテル教会全体のためにも多大の貢献をしている。戦後の四八年、再建ルーテル教会第一回の全国総会で副議長兼伝道部長に推挙されたのははじめとして、その後総会議長あるいは各種委員(その多くは長)などの要職を歴任してい

る。加えて、私立幼稚園連盟役員などに就任、とくにキリスト教幼児教育にも積極的に関与している。

山内はまたすぐれた文筆の人でもあった。博多教会着任後に翻訳したジョセフ・スタムプ著『ルーテル小教理問答書講解』は、牧師による洗礼志願者育成に大きく寄与したという。さらに、戦後本書をもとに執筆されたといわれる信徒向けの『信仰の手引』は、名著の誉れ高く十数版を重ねている。聖文舎刊の『信徒のための聖書講解シリーズ』にも、コリント第一、第二などを執筆している。その他珠玉の童話集『とべたらいいなあ』をふくむ、およそ三〇冊の著書、訳書を公にしている。論文、エッセイも数多くあり、中でも、『日本福音ルーテル教会・九州における伝道の歩み』は、碩学山内ならではの卓論である。

五八年山内は博多教会を辞し、東京蒲田教会に転任した。蒲田在任は一七年で高齢のために引退、福岡に移り住んだが、一九八(平成一〇)年二月二一日、博多教会創立記念日の日に天に召された。九五歳であった。

内海季秋議長の頃

総会議長 1968年～1971年

徳重義和(定年教師)

青年伝道への熱い思い

第二次世界大戦中小岩教会にあつて厳しい時代を生き抜いた内海季秋は、一九四七年日本基督教団から離脱した日本福音ルーテル教会の再建に尽力し、やがて熊本の大江教会に移ると、その時代の中で青年伝道を自らの召しと受け止めて、自らの教会で青年信徒の養成に努めるとともに、各地区、全国レベルの青年会連盟を育てることに力を注いだ。



しばしば伝道部長に選ばれると、そのはつきりした力点のひとつをそこに置いたのだった。そのような青年への働きと支えの中から、以後今日に至るまでわが教会を支える多くの堅実な信徒、また牧師たちを起こしたことを、私自身その中から育てられた一人として深く心に留めている。

ルーテル諸派合同から、議長への選出へ

日本福音ルーテル教会は一九五三年にはフィンランド系の福音ルーテル教会と合同していたが、戦後ミズーリ派を始めアメリカや北欧から宣教師が送られてくるようになると、これらは

あるいは最初から協力し、あるいは別個に働いて、それぞれの教会形成に努めていたから、こうしたルーテル諸派合同の必要も考えられるようになっていった。

全ルーテル自由協議会に始まり、文書伝道における協力は以後の聖文舎の働きに至り、さらに五〇年代前半には合同委員会にまで至っていたが、教区など組織問題は暫定的に解決を見たものの、教義問題、神学校問題などで一致に至らず、協議が整って合同したのは東海福音ルーテル教会だけとなった(一九六三年)。

この合同以後議長を務めた岸千年の後を受けて一九六八年第三回総会で議長に選出されたのが内海季秋だった。

合同の初期の課題は新しく組織された、かなりの独自性をもつ教区組織の基礎固めだった。しかし独自の働きと活動に向かおうとする教区と、全教会レベルの働きを海外からの支援予算を握って推進しようとする各局との二重構造もまた問題になりつつあった。

自立問題の急速な表面化

実はこの総会では、当時の財務

担当者から、このままの活動を続けていけば、三年で三六〇〇万円(当時の年間収入の三倍相当)の赤字になるとの訴えがあり、自給の急務が論じられ始めていた。日本の経済成長に伴う経費の増大と海外教会の支援削減方針とが相まつてのことである。

内海議長時代はこうして財務問題との取り組み、自給に向けての課題が緊急のこととなったのである。常議員会も懸命に取り組んではいたが、長年の甘えの体質は脱却できそうになかった。

ところが一九六九年四月エチオピアのアスマラで開催された海外教会との協力会議(JCMと呼ばれていた)の席上、内海議長は一九七四年末までの通常予算関係の自給を宣言したのである。帰国後の常議員会では、前もっての協議なしの独断的な発言との批判や非難も厳しかったと聞く。

一九七四年までに自給

内海議長JCM会議で表明



1969年「るうてる」6月号

「アスマラ会議の流れでは、早晚自給の決断を迫られるところだったと思う。その前にこちらから言い出さなければと思ったのだ」とその決意のほどをその後個人的にも聞いたものだった。

その総会議長時代には、全国的な流れの影響も受けて、神学校三鷹移転に加えて、その大学院設置問題に絡む紛争、教師試験拒否問題などもあつたが、内海議長は教会的姿勢を崩すことはなく、これに誠実に対応した。

任期中の常議員会はどうか自給に向けての態勢を整えはしたが、一九七二年総会はその積極的な実行を期待して総会議長宝珠山幸郎など若い執行部を選出した。その執行部自身の言葉によれば、「船を走らせながら、その外装をすっかり変える」という言い方そのままの、自給への厳しい歩みと努力が始まることとなったのである。

具体的には支出の厳しい見直しと教区単位の自給、収益事業の開始という形を取っていた。局は廃されて、教区中心の態勢にも進んでいたのだった。

今の日本福音ルーテル教会はそこからどれだけ先に進んでいると言えるだろうか。(敬称略)

最初の教会憲法制定と年会議長の誕生

1920年4月

青田 勇

日本福音ルーテル教会の最初の憲法は一九一九（大正八）年三月二十五日より博多教会にて四日間開催された臨時年会において採択された。

そこで日本福音ルーテル教会と北米一致ルーテル教会に所属する在日宣教師会との「協約」となる「協同基礎章項」の逐条審議を行い、修正の上、それをまず決議した。三日目と四日目は「日本福音ルーテル教会憲法」案を逐条審議したが、予定の会期に議事は終了できずに、五日の二十九日の朝まで協議を延長し、そこで憲法が最終的に承認された。

これは宣教開始から四半世紀を経た、日本福音ルーテル教会が日本の地において自主・自律の精神に基づき、宣教の業を残していくための組織化を実現し、また教会の信条に基づきルーター派としての信仰的価値の基本原理を明確化するためにも、さらには、ボードと宣教師会から一方的に指導された時代から主体的行政責任態勢を構築し、協同・

共同ミッションの新たななる宣教の時代への端緒を開くためにも重要な歴史的作業であった。

この新憲法の意義を教会法的及び宣教師論的にまとめると次のようになる。まず、第一に「憲法」、すなわち「Constitution」の原意を考えると、ここには「作り上げる」という意味がこの出来事に含まれている。つまり、「教会を築く」ということと共に、日本において「教会を満たす」ために「憲法」が制定されるのである。ルーター派教会である「日本福音ルーテル教会」としての「教会のかたち」というものを日本という宣教の現場の中で自主的に形成するための最初の教会憲法が作製された。第二に、この憲法はルーテル教会に所属する宗教団体としての規約そのものであり、その団体組織の統治の在り方とその存在根拠を示す日本のルーテル教会での最初の規約である。日本人の牧師・信徒が対等な責任主体となつて、自ら「共同して教会を形成する」という基本理念は弱かつたにしても、ルーテル教会の

教理的基盤に立ったひとつの教会組織の在り方を明確に示すことになった。第三に、この憲法はルーテル教会の基本的原理とその正当性を教会法的に宣言したものである。明治のプロテスタント諸教会が聖書中心主義と福音主義的態度に固執した中で生きつづけ、教会論の普遍性と独自性の不明確さが強かつた傾向に比べると、法的根拠に立った教会論の骨格を鮮明に表明している。第四に、教会の一致の教理的基盤を基本信条だけでなく、宗教改革期の根本信条も掲げて、それが信仰の基本原理であり、かつ教会の存立と伝統の基礎であることを表明している。つまり、ルーター派の教派性の立場を明確に告知している憲法である。日本の諸教会が独自の教理と機構に消極的態度と無意識的な懐疑を抱いてきたことを考えると、「日本福音ルーテル教会憲法」は教派性を前面に置き、そこでの教会論と宣教論をそれなりに打ち出した点において歴史的に評価できる作業であった。

この憲法の第三章第八條では教会の「政治」である教会の意思決定及び行政執行の機関としての總會について、「日本福音ルーテル教会ノ總會ハ年會及宣教師會ノ二ツヨリ成立ス」と規定している。つまり、

教会の「政治形態」は年会と宣教師会の二院制によつてゐる。さらに、第五章「任務ト権能」の第十七條で「年會ハ決議セル一切事項ハ即時之ヲ宣教師會ニ通告シテ協賛ヲ求ムベク宣教師會ハ決議セル事項ハ年會ニ於テ更ニ之ヲ附議シテ賛否ヲ決ス可シ、兩會議ノ可決ヲ經サル議案ハ實行ス可カラズ。兩會議ノ決議ガ一致セザル場合ニ於ケル處置ニ關シテハ別ニ協約ヲ以テ之ヲ規定ス。」と謳つてゐる。つまり、「宣教師会」と「年会」の總會の決議と行政執行の権限が同等に置かれてゐる二院制のものである。總會閉会中の實質的執行機関としての「行政委員」も、第十一章「行政委員」の第四

一條から第四十四條において触れており、そこで「行政委員ハ宣教師會ノ行政委員ト共ニ聯合行政委員會ヲ組織シ協同ノ實ヲ擧グルト共ニ年會ヲ希望主張ノ貫徹ニ勤ム可シ」として、總會閉会中の行政執行機関として、年会と宣教師会により選任された教職により「聯合行政委員会」を設けることとした。

「宣教師会の二院制」の制度が廃止され、内外人の区別なく一つの總會の下に統合されるのは、八年後の一九二八（昭和三）年五月の博多教会での第九回總會まで待たねばならなかつた。

この最初の「日本福音ルーテル教会憲法」は、臨時總會での議決に従い、憲法の施行日を翌年の、一九二〇（大正九）年四月一日と記入し、この下での第一回總會が、同年四月六日より熊本で開かれ、二日目は憲法第二章「信仰」条項をもつて宣誓式が行われた。なお、この總會で新憲法に沿つて、年会議長として選出されたのは久留米教会の牧師・米村常吉であった。



Rev. T. Yonemura and Family, Kurume.
久留米福音ルーテル教会牧師米村常吉氏及び其ノ家庭

教職按手・認定年度一覽(1899年～2004年)

年	
1899(明32)	山内量平 山内直丸
1900(明33)	
1901(明34)	米村常吉
1902(明35)	
1903(明36)	
1904(明37)	
1905(明38)	
1906(明39)	
1907(明40)	
1908(明41)	
1909(明42)	
1910(明43)	
1911(明44)	
1912(明45/大1)	瀧本幸吉郎
1913(大2)	
1914(大3)	
1915(大4)	
1916(大5)	
1917(大6)	青山彦太郎
1918(大7)	值賀虎之助 和佐恒也 本田傳喜 松本学明 三浦 冢 龜山萬里
1919(大8)	山田与八
1920(大9)	高島貞久
1921(大10)	石松量蔵 鷺山誠晴 川瀬徳太郎
1922(大11)	武藤 醇 渡辺 潔 稲富 肇
1923(大12)	
1924(大13)	佐藤繁彦
1925(大14)	大熊四郎 坪池 全 古坂剛隆
1926(大15/昭1)	
1927(昭2)	岩永則恭
1928(昭3)	吉田康登 大内弘助
1929(昭4)	富永俊二 平井 清 岸 千年
1930(昭5)	福山 猛
1931(昭6)	川桐新一 松岡幹三 山内六郎
1932(昭7)	河島龜三郎
1933(昭8)	
1934(昭9)	内海季秋 青山四郎
1935(昭10)	
1936(昭11)	坂井賢男 武井正悟 田坂惇巳
1937(昭12)	東 菊次
1938(昭13)	大川鐵次 妹尾武夫
1939(昭14)	岡本武夫 加藤亮一
1940(昭15)	俵 貢 牧瀬雄吉
1941(昭16)	岡本栄一
1942(昭17)	井芹貞安 太田敦次 長沼三千夫 名尾耕作 北森喜蔵 坪池 誠 坂根利永
1943(昭18)	
1944(昭19)	
1945(昭20)	
1946(昭21)	
1947(昭22)	間垣洋助 中尾忠雄 牛丸省吾郎
1948(昭23)	井手尚彦 白髭市十郎 柏木信隆 牛島義明
1949(昭24)	藤田武春 江口武憲
1950(昭25)	三浦義和
1951(昭26)	木野 学
1952(昭27)	
1953(昭28)	矢野英武
1954(昭29)	益田啓作 石居正己
1955(昭30)	谷口博章 石田順朗 大石泰三
1956(昭31)	林 宏 南里卓志 折田良三 河田 稔
1957(昭32)	久米芳也 宝珠山幸郎 橋野省二 江副栄一 園田 剛 高倉美和 岸井 敏 町野洋 内野重人 (右上段に続く)

年	
1957(昭32) 続	古財克成 緒方一誠
1958(昭33)	萩原重信 岡 正治 森 勉 福本秀盛 藤本義和 白石郁夫 安光幸造 大柴俊和
1959(昭34)	徳善善和 真木政治 前田貞一 吉田昌宏 松本教義 武村 協 角田 健
1960(昭35)	賀束周一 内海 望 歌野繁次 才木種親 河島与施夫 石橋幸男 柏田憲吾 佐藤邦宏
1961(昭36)	田中良浩 内海 革 岡田廣吉 野田藤男 星野徳治 小島恵一 森 優 小泉 潤 塩原 久 日野俊夫 平井 栄
1962(昭37)	杉山 昭男 浅見正一 藤井 浩 石井 昇 金海秀夫 初瀬正昭
1963(昭38)	山本達司 三浦芳夫 山本 裕
1964(昭39)	中山 親 中嶋 誠 戸田 裕 隈部静興 北尾一郎 逸見義典 和田英男 安富信博 野口泰介 西坂徳家 古坂生也
1965(昭40)	伊藤文雄 狩野具男 森部 信 上道信義 宇野正徳 古越俊行 藤本 武
1966(昭41)	前田幸男 河島公美 長尾博吉 森 武夫 坂口 充 岩崎 修
1967(昭42)	木下海龍 白川 清 早川顕一 田内 豊 大岩正己
1968(昭43)	小島三義 丹澤 桂 清重尚弘 内田隆之 明比輝代彦 川口 誠 栗原 茂
1969(昭44)	松原 清 中村圭助 野口幹夫 加藤忠明 重富克彦 高塚郁男 竹内正一 小松 明
1970(昭45)	門脇聖子 通木一成
1971(昭46)	重野信之 木村長政 横田弘行 市原正幸
1972(昭47)	土井 洋 鐘ヶ江昭洋 吉谷正典 長岡一郎
1973(昭48)	星野幸一 三浦 謙 富永明彦 大石栄太郎
1974(昭49)	浜田道明
1975(昭50)	松隈貞雄 藤井邦昭 松木 傑 尾田光司 谷川卓三 渡辺純幸 青田 勇 杉山晴吉
1976(昭51)	山之内正俊 勝部 哲 藤井邦夫 野口雄一 江口再起 江藤直純 渡辺 進
1977(昭52)	東 和春 村松由起夫 合田俊二
1978(昭53)	田中博二 花島啓行
1979(昭54)	竹田孝一 大宮陸孝 松田繁雄 小副川幸孝
1980(昭55)	箱田清美 徳野昌博
1981(昭56)	落合成光 鈴木 浩 齊藤幸二 高井保雄
1982(昭57)	齊藤忠碩 原口尚彰
1983(昭58)	平岡正幸 中島康文 中川俊介
1984(昭59)	松岡俊一郎
1985(昭60)	野村陽一 太田一彦 立山忠浩 山田浩巳 永吉秀人
1986(昭61)	大柴讓治
1987(昭62)	富島浩史 秋山 仁 立野泰博
1988(昭63)	松本義宣
1989(平1)	紙谷 守 杉本洋一 松本太郎
1990(平2)	浅野直樹 石居基夫 三野慶仁 藤間寿紀
1991(平3)	内藤新吾 内藤文子 沼崎 勇
1992(平4)	佐藤和宏 白川道生 林 巖雄 安元孝裕
1993(平5)	末竹十大 徳弘浩隆 中村朝美
1994(平6)	渡辺賢次 角本 浩 河田 優
1995(平7)	鈴木英夫 田島靖則 滝田浩之
1996(平8)	三浦知夫 日笠山吉之 平岡仁子
1997(平9)	黄大衛
1998(平10)	宮沢真理子 笠井 均
1999(平11)	安井宣生 岡田 薫 朝比奈晴郎
2000(平12)	李 明生 宮本 新
2001(平13)	和田憲明 藤井求義
2002(平14)	坂本千歳 小泉 嗣 白髭 義
2003(平15)	伊藤早奈 岩切雄太 加納寛之 水原一郎
2004(平16)	小泉 基 後藤直紀